フィールド通信

ウガンダの HIV/AIDS 対策と性をめぐる「公序良俗」のゆくえ

中澤 芽衣

幹線道路で目にする看板

2013 年 9 月、私は長距離バスに乗って旅をしていた。このときが初めてのフィールドワークであり、2 ヶ月間の滞在期間で今後の調査地を探すことが主な目的であった。ウガンダに渡航して約 1 ヶ月が経過し、ウガンダの北部や東部、南部を訪問した私は、各地の町の雰囲気や人びとの様子、気候の変化について、少しずつ自分の肌で感じとることができるようになった。

乗り合いバスや長距離バスに乗車していると

写真 1　幹線道路沿いでよく目にする家族計画に関する看板

き、私は気になっていたものがある。それは幹線道路沿いでよく目にする「避妊用具（主に男性用コンドーム）の使用や家族計画を啓発する看板」であった（写真 1）。この看板は避妊用具の販売促進のために作成されたものではなく、米国国際開発庁（USAID）やアメリカ疾病予防管理センター（CDC）、国際 NGO の支援をうけて作成されていた。

日本では高速道路や幹線道路沿いに企業の広告や商品の宣伝を目的とした看板を目にすることはあったが、避妊用具や家族計画といった性に関する看板を目にすることは一度もなかったため、私はとまどいを隠せなかった。その後も、ウガンダの地方都市や首都カンパラで、避妊用具の使用や家族計画を啓発するための看板やポスターがバーのトイレや大学の構内、ショッピングモールなどあらゆるところに貼られているのを目にした（写真 2）。

ウガンダにはびこる HIV 感染と国家の動向

ウガンダでこのように避妊用具の使用や家族計画を啓発することがさかんな理由のひとつに、HIV/AIDS の問題が存在する。現在、HIV 感染は世界的に問題視され、国連合同エイズ計画（UNAIDS）や世界保健機関（WHO）を筆頭に、国際機関や国際 NGO が問題解決に向けて、次々と政策を打ち立てている。2013 年時点では、世界における HIV 陽性者は約 3500 万人と報告され、そのうちの約 70%を占めるおよそ 2500 万人がサハラ以南アフリカに居住している（WHO 2013）。HIV/AIDS はサハラ以南アフリカにおいて未だに根強

写真 2　バーでみられたコンドームの使用を促すポスター

い問題である。

ウガンダにおける HIV 感染率[1] は、2014 年時点で 7.3%を示し、世界平均の 0.8%と比べると、ウガンダはいまだに高い感染率を示している。それでも、1992 年におけるウガンダ国内の HIV 感染率は 18.5%と非常に高く、その当時に比べれば、感染率は半分以下に低下している。

ウガンダでは、1970 年代から 1980 年代前半にかけて体がだんだんやせ細っていき、最後は死に至る「スリム病（slim disease）」が猛威をふるっていた。1982 年、このスリム病の正体は AIDS であることが明らかになり、国民は大きなショックを受けた（吉田 2005）。そして、1980 年代以降、HIV/AIDS はウガンダ国内において大きな爪痕を残した。

1962 年の独立以降、ウガンダではクーデターが繰り返され、国内政治が混乱していたが、1986 年にヨウェリ・ムセベニ（Yoweri Museveni）が大統領に就任し、政治的混乱が終結する。ムセベニは大統領に就任すると、すぐに HIV/AIDS 問題を国家の緊急課題として掲げ、HIV 感染の拡大を抑制するための政策を次々と打ち立てた。しかし、1986 年以降も、HIV 感染の拡大は止まらず、1992 年には、ウガンダの首都や地方都市の一部における妊産婦の HIV 感染率は 30%を超えたと推測されている（UNAIDS 2010）。

1993 年以降、政策が功を奏し、HIV 新規感染者の報告数は減少する傾向をみせはじめ、2006 年には HIV 感染率は 6.4%となり、ピーク時に比べると著しく低下した。2014 年の HIV 感染率は 7.3%（UNAIDS 2014）と、再び HIV 感染率が上昇している。

現在、ウガンダはサハラ以南アフリカにおいて HIV 感染の拡大を抑制することに成功した国として知られている。国家の緊急課題として感染拡大を抑制する政策から、HIV 感染予防に重点をおいた政策に移行した現在、ABC アプローチと呼ばれる政策が中心となっている。ABC の意味は、A は「Abstinence（性行為を慎む）」、B は「Be faithful（貞節を守る）」、C は「use Condom（コンドームの使用）」であり、頭文字をつなげ合わせて ABC と名付けられている。ABC 政策では、HIV 感染予防に有効なコンドームの使用を主に推奨している。国内の経済や社会が HIV/AIDS により過去に大きなダメージを受けた経験から、ウガンダでは国家をあげて、HIV 感染を予防するための活動に引き続き、取り組んでいる。

町なかでみられる HIV 感染の予防対策

2013 年以降、私はウガンダ南西部のルウェンゴ県の農村で調査している。調査村には電気が通っておらず、パソコンやカメラ、充電式電池といった電気機器を充電するために、1 ヶ月に数回、私は町へ出かけた。調査村と町との距離は 5km ほどである。私が町でいつも利用するゲスト・ハウスは、夜になると大音量で音楽を流しながらアルコール飲料を提供するバーを併設している。正面入り口からではバーにしかみえないのだが、バーを横切

1 妊産婦の HIV 感染率などと特定しないかぎり、ここでは、HIV 感染率は 19～45 歳の成人に占める HIV 陽性の人口割合を表している。

ると宿泊用の部屋が 20 室ほど横一列に並んでいる。驚くことに、バーからゲスト・ハウスへの入口にはコンドームの入った透明の容器が壁に設置されており、誰もが簡単に無料で入手できるようになっている。

コンドームを入れている容器には、英語とイラストでコンドームの使用方法が丁寧に書かれ、使用者は扱い方を容易に理解できる。使用方法についての文章とイラストの上には、“The correct way to protect yourself from HIV using a condom（コンドームの使用による HIV 感染を防ぐ正しい方法）”と書かれており、性行為におけるコンドームの使用は HIV 感染のリスクを軽減することを強調されている。幹線道路で目にした看板と同様に、エイズヘルスケア基金（AIDS Healthcare Foundation）やウガンダケア（Uganda Cares）といった保健省や国際 NPO からの支援をうけて、このコンドームの無料配布は実施されている。

ウガンダに滞在していると、HIV/AIDS が人びとの日常生活において深刻な問題であることを肌で感じるとともに、国際機関や保健省、国際 NGO、NPO が HIV 感染の予防に力を入れていることを垣間見ることができる。

農村でみられる HIV 感染の予防対策

調査村には医療施設はなく、緊急を要するときも、人びとは自分の足で町の医療施設に行かなければならない。村から町までさほど離れていないが、農作業や家事、育児に追われて町に行く時間を確保できない女性は多く存在する。そのような女性たちの子供の予防接種もれを防ぐために、町の看護師が 3 ～ 4 ヶ月に 1 回のペースで村に訪れ、予防接種を実施している。

2014 年 7 月 6 日、調査村内でポリオの予防接種を実施することが決まった。その前日、村長はバイクに乗りながら村内をまわり、ポリオの予防接種や実施の場所、時間について拡声器を使ってアナウンスしていた。

予防接種の当日、午前 9 時に村長と私はバイクに乗って、実施場所に向かった。私たちが到着した場所は、小学校の校庭のへりで、教会のそばの木陰であった。村長と私は学校から机 1 台と椅子を何脚か運び、簡易ではあるが小さな診療所をつくった。机を運びだしているときに、実施場所を学校の校庭にした理由を尋ねたところ、早朝から村の人びとは礼拝のために教会へ来るので、礼拝後に予防接種を受けることができるのだと村長は答えた。

1 時間が経ったころ、2 人の女性看護師がポリオの生ワクチンをいれた容器を抱えながら、小さな診療所に現れた。予防接種の準備は整ったが、礼拝が終了するまで私たちはこの小さな診療所で待つことになった。照りつける日差しのもと、看護師 2 人と村長、そして、私の 4 人は 30 ～ 40 分ほど話し込んだ。

そのなかで看護師の 1 人がポリオの生ワクチンだけでなく、HIV 抗体検査のキットも持ってきたと話した。私はポリオの予防接種だけかと思っていたため、HIV 抗体検査を実施することに驚いた。しかし、村長は動じることなく、そのまま看護師の話を聞いていた。看護師は、驚いている私に「日本もおなじようなキットを使って、HIV 抗体の検査をしているの？」や「妊娠した女性は HIV 抗体検査を定期的に受けているのか？[2]」、「あなたは今までに何回、検査したのか？」という質問を、矢継ぎ早に投げかけた。私はこれらの質問にうまく答えることができず、少し困惑した表情を彼女にしめした。そのような私をみて、質問をした彼女の顔も次第に困惑した表情となった。彼女の想像する日本のイメージは、医療施設が数多く存在し、国民に対して HIV 抗体検査もしっかりと行き届いている国であったのだ。そのため、HIV 抗体検査が日本で普及していないことが彼女には理解しがたいようだった。

やがて礼拝が終わり、教会から人びとがぞろぞろと出てきた。この小さな診療所は礼拝帰りの人びとの目にとまる場所につくったにもかかわらず、

2 妊婦は妊娠期間中に 3 回（主に 9 週目、18 週目、27 週目）、HIV 抗体検査を受けることを推奨されていると、看護師は説明していた。

写真 3　小学校の校庭につくった小さな診療所に子供を連れてきた母親たち

礼拝者の多くは何も興味を示さずに通りすぎた。10 ～ 15 分が経った頃から、子どもを連れた母親たちが診療所に集まり始めた（写真 3）。村長みずからポリオの予防接種を受ける子どもとその母親の名前を聞きとった。村長の手元にある出生記録と照合し、ポリオの予防接種を受けるのに適正な年齢であるかを確認した（写真 4）。年齢を確認したのち、看護師 2 人のうち 1 人がポリオの生ワクチンを子供の口内に入れた。予防接種を終えたのち、看護師はつぎに母親を椅子に座らせ、HIV 抗体検査の実施について説明をした。ポリオの予防接種のために子供を連れてきた母親は検査を受けるべきだと、村長は意見を述べた。

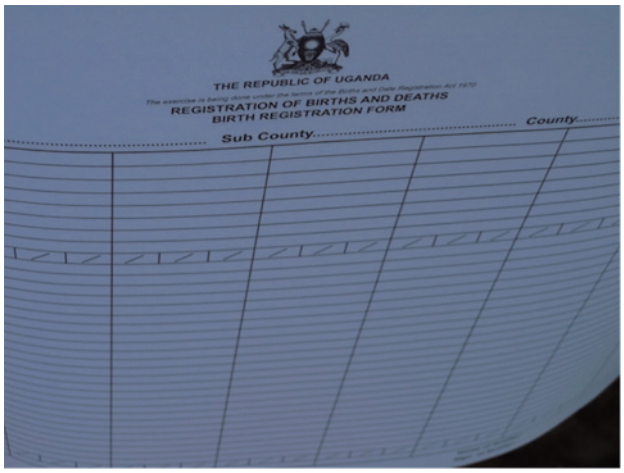

写真 4　村長が書きとめた村の人びとの出生記録

写真 5　町の看護師が持ってきた HIV 抗体検査のキット

母親に HIV 抗体検査を実施する理由について、看護師に尋ねたところ、「子供を育てる役割を母親がおもに担っているため、健康でいなければならない。そのため、こまめに検査をうけて、自分の健康をチェックする必要がある」と説明した。その後、看護師は HIV 抗体検査キットを取り出し、母親の中指の先に消毒された針をさし、採血をした（写真 5）。

ポリオの予防接種を受けたのちも、泣き続ける子供の声を聞きつけたのか、小さな診療所には見物客がだんだんと集まってきた。看護師は、見物客のなかにいた 14 ～ 15 才ぐらいの女の子を呼び、HIV 抗体検査を受けることを勧めていた。ウガンダでは、近年、若年層の HIV 感染が深刻な問題となっており、HIV 感染の早期発見のために 10 歳以上の女性には検査を勧めていると看護師は説明した。

この日、村長と 2 人の看護師は小学校の校庭につくられた診療所で談笑を交えながら、午前 11 時から午後 3 時すぎまでの計 4 時間、ポリオの予防接種と HIV 抗体検査を実施した。最終的に HIV 抗

体検査を受けた人数は合計 17 人で、男性と女性の内訳をみてみると、男性が 2 人、女性が 15 人と圧倒的に女性のほうが HIV 抗体検査を積極的に受けていた。男性は見物客として集まっていることが多く、HIV 抗体検査を勧められるとそそくさとその場を立ち去る男性もいた。HIV 抗体検査を受けた男女比が異なっていたことについて、女性看護師は「たとえ自分が HIV に感染していたとしても、男性は知りたがらない。自分が感染していることはないと思い込んでいる」と不満を口にした。村の男性のなかには、HIV 感染を他人事のように考えており、検査を受ける必要がないと思っているようであった。その後、机と椅子を学校の教室に戻し、看護師 2 人はバイクに乗って、町へ帰っていった。

ウガンダにおける性をめぐる政策の動き

ウガンダでは避妊用具の使用や家族計画の啓発、HIV 抗体検査を積極的に実施し、HIV 感染の予防について国家をあげて取り組む一方で、近年、HIV 感染の主な感染経路となる性行為に対して厳しく取り締まる動きもみられる。

現在、女性のミニスカート着用は性的興奮を促すとして違法とされている。2015 年には女性が下着姿で歌っている音楽のプロモーション・ビデオが「反ポルノ法（Anti-Pornography Act）」[3] に違反しているとして、この女性歌手が逮捕された。このことは表現の自由を妨げているとして、ウガンダ国内の若者や国際 NGO が抗議運動を繰り広げた。

2014 年 2 月 24 日には、ムセベニ大統領が「反同性愛法案（Anti-Homosexuality Act）」に署名し、この法律が成立した。この法律は、同性愛者同士の恋愛を禁止し、最高刑には死刑を科す厳しいものであった。反同性愛法案が成立してから、ウガンダは国際社会や国内の人権活動家から多くの非難をうけ、この法案は 2014 年 8 月にひとまず無効となった。

アメリカ合衆国では、2015 年 6 月 26 日、アメリカの連邦最高裁判所がすべての州で同性婚を合法化することを定め、性に対して多様かつ柔軟な対応をみせている。今までは排除の対象とされてきた同性愛者に対して、アメリカをはじめ、世界各国が彼らを容認する姿勢をみせはじめている。しかし、ウガンダでは、性に関する表現や同性愛者を厳しく取り締まるなど、世界の趨勢とは逆の方向に舵をきっている。

このような性を強調したり、性行為を助長する表現に対する国家の厳しい取り締まりは、HIV 感染の拡大と蔓延が大きな爪跡を残しており、今もなお法律や政策の立案に多大な影響を与えていることをうかがわせる。今後、ウガンダにおける国家の HIV/AIDS 対策と性にまつわる動きに注目していきたい。

3 ポルノの制作、売買、公開を取り締まる法案であり、2014 年 2 月に施行された。最長 10 年の禁固刑と最大 1000 万シリング（約 37 万円）の罰金を科せられるが、児童ポルノの場合、禁固刑は最長 15 年、罰金は最大 1500 万シリング（約 55 万円）にまで引き上げられる。

引用文献

Joint United Nations Program on HIV/AIDS. 2010. The HIV/AIDS Epidemiological Surveillance Report 2010. [http://www.unaids.org/sites/default/files/en/media/unaids/contentassets/documents/data-and-analysis/tools/spectrum/Uganda2011report.pdf]（2015 年 9 月 7 日閲覧）

——— 2014. HIV and AIDS estimates (2014). [http://www.unaids.org/en/regionscountries/countries/uganda]（2015 年 9 月 7 日閲覧）

World Health Organization. 2013. Number of People (all ages) living with HIV. [http://www.who.int/gho/hiv/epidemic_status/cases_all/en/]（2015 年 9 月 7 日閲覧）

吉田栄一 2005.「第 2 章 ウガンダ——エイズ対策「成功」国における政策と予防・啓発の果たした役割——」牧野久美子・稲場雅紀編『エイズ政策の転換とアフリカ諸国の現状——包括的アプローチに向けて——』アジア経済研究所 52:41-65

（なかざわ　めい／京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科）

フリードリッヒ・ユリウス・ビーバーの生涯と、彼の遺した資料群

吉田 早悠里

フリードリッヒ・ユリウスとカファ地方

2011 年 3 月、エチオピア南部諸民族州カファ地方の行政都市ボンガにて、盛大な式典が開催された。これは、カファ地方で自然環境保全を目的とした活動を実施しているドイツの NGO である NABU（Nature and Biodiversity Union）が、2010 年 6 月にカファ地方の一部の地域がユネスコ生物圏保護区（UNESCO Kafa Biosphere Reserve）に指定されたことを記念する祝典として企画・実施したものである。この式典の開催にあたり、NABU はオーストリアから一人の男性を招待した。その人物とは、20 世紀初頭にエチオピアを訪れたフリードリッヒ・ユリウス・ビーバー（Friedrich Julius Bieber、以下フリードリッヒ・ユリウス）の孫クラウス・ビーバー（Klaus Bieber）である（写真 1）。

フリードリッヒ・ユリウス・ビーバーは、カファに関する民族学的研究の第一人者である。20 世紀初頭に 3 回にわたってエチオピアを訪れ、なかでも 1905 年 6 月から 7 月には、エチオピア帝国に征服されて間もないカファ地方を訪問、滞在している。そして、カファ地方に暮らす人々の生活や民俗、歴史に関する多くの記述を遺し、カファ研究の基本的枠組みの形成に大きな貢献を果たした。

写真 1　フリードリッヒ・ユリウス
提供：クラウス・ビーバー（撮影年不明）

筆者は、2014 年 9 月からオーストリアのウィーンにて、フリードリッヒ・ユリウスが遺した資料群の調査に着手した。本稿では、フリードリッヒ・ユリウスの経歴と、彼が遺した資料群について報告する。

フリードリッヒ・ユリウスの人生[1]

フリードリッヒ・ユリウスは、1873 年にウィーンで生まれた。1881 年、フリードリッヒ・ユリウスは 8 歳の時に、父親からクリスマスの贈り物として『アフリカ横断』（Burmann 1880）を受け取った。この本はその後の彼の人生に大きな影響を与えるものとなり、彼は最初の頁に「1881 年のクリスマスにパパから受け取った。おそらく、私の将来の運命を予言するものであった」と書き込んでいる。

アフリカに強い関心を抱くようになったフリードリッヒ・ユリウスは、大学進学を目指し、勉学に励んだ。しかし、彼が 13 歳のとき、父親が他界した。これにより、一家は経済的困難に陥り、フリードリッヒ・ユリウスは勉学を断念せざるを得ず、靴職人の徒弟となった。それでも、アフリカの大地を踏むことを切望し、1890 年に徒歩と鉄道にてアドリア海に臨むトリエステとフィウメ（リエカ）まで到達する。同年 11 月には、ドナウ川に沿って黒海に向かい、イスタンブールまで旅する。しかし、アフリカに到達することは叶わず、フリー

1 この部分の記述に関しては、ホルツアプフェル（Holzapfel 2012）とクラウス・ビーバー（Bieber 2015）に依拠している。

ドリッヒ・ユリウスはウィーンに戻って書店で販売員として勤務した。そして、書店で手に取った数々の本からアフリカに関する知識を蓄えた。なかでも、フリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア人の元軍人フォン・カロットの著作『東洋とヨーロッパ』を読み、エチオピア高地の虜になった[2]。

フリードリッヒ・ユリウスは、書籍から得た知識をもとに、アフリカ、とりわけエチオピアについての一般講演をしばしば行った。これにより、フリードリッヒ・ユリウスは2人の退役軍人と知り合う。彼らは、スーダンにてマフディー（ムハンマド・アフマド）の反乱で捕虜となっていたオーストリア人軍人ルドルフ・カール・フォン・スラティン（Rudolf Carl von Slatin）を解放するためにスーダンへ行こうとしていた。フリードリッヒ・ユリウスはアフリカの専門家として彼らに同行することになり、1892年、初めてアフリカの大地を踏む機会を得た。3人はイタリア領だった現在のエリトリアを訪れ、そこからエチオピアを通ってスーダンへ入国しようと試みた。しかし、イタリア植民地政府は彼らがエリトリアからエチオピアへの国境を通過することを認めなかった。

帰国後、フリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア＝ハンガリー帝国の貿易省（Ministry of Trade）に勤務する傍ら、アフリカに関する講演をたびたび行った。その内容は、彼自身の旅や、ヨーロッパで植民地をもたなかったオーストリア＝ハンガリー帝国と、アフリカで独立を保っていたエチオピア帝国の間での貿易の可能性に関するものであった。このような活動が実を結び、ハンガリー人の実業家アーノルド・セル（Arnold Szél）の指揮のもとで、セル社の取締役レオポルト・モルゲンシュテルン（Leopold Morgenstern）とフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアに渡航するための費用として、約70社から出資を得ることに成功した。1904年1月、フリードリヒ・ユリウスらの一行は、贈り物や商品サンプルが入った36個の木箱を携えてエチオピアに赴いた。アディス・アベバに到着すると、メネリクⅡ世のアドヴァイザーであったスイス人アルフレッド・イルク（Alfred Ilg）を通して、フリードリッヒ・ユリウスらはメネリクⅡ世から謁見を許され、勲章を授かった。独学で習得したアムハラ語を話すフリードリッヒ・ユリウスに対して、メネリクⅡ世は大変驚いたと伝えられている。1904年6月、フリードリッヒ・ユリウスは、彼にとって憧れの土地であったエチオピアを訪問した興奮が醒めやらぬまま、アディス・アベバを後にした。

ウィーンに戻ったフリードリッヒ・ユリウスは、オーストリア＝ハンガリー帝国とエチオピア帝国の間での通商と友好に関する協定の締結に尽力するようになる。1905年1月、エチオピアに公的使節団が派遣された際、フリードリッヒ・ユリウスはエチオピアの専門家およびアムハラ語の通訳として使節団に加わった（写真2）。使節団は、3月にメネリクⅡ世に謁見して帰国の途に就いたが、フリードリッヒ・ユリウスは、使節団の一員であっ

写真2　アディス・アベバでのフリードリッヒ・ユリウス（写真中央）
提供：クラウス・ビーバー（1905年撮影）

2 フリードリッヒ・ユリウスは、フォン・カロットによる『東洋とヨーロッパ』（von Callot 1854-55）の一部を抜粋したものを1923年に『クシとハベシを通る旅』（von Callot 1923）と題して編集・出版し、その序章を執筆している。

たバロン・フォン・ミリウス（Baron von Mylius）とエチオピアに残り、カファ地方への訪問を試みた[3]。

1905 年 4 月 19 日、ミリウスとフリードリッヒ・ユリウスらのキャラバンは、カファ地方にむけてアディス・アベバを出発した。ノンノ、リンム、エンナルヤ、ジンマを旅し、6 月 7 日にゴジェブ川に達した。そしてカファ地方に入り、帰路に就く 7 月 2 日までのおよそ 1 か月間、カファ地方に滞在した。彼らは当時のカファ地方の行政都市のほか、1897 年まで同地に繁栄したカファ王国の王都が位置した場所や王墓を訪れた。カファ地方での滞在期間中、フリードリッヒ・ユリウスは継続的に日記を記すとともに、カファ語を学び、カファ王国の歴史や慣習、宗教などについて人びとから聞き取り、記録した。同年 9 月、彼らはアディス・アベバを出発し、ウィーンに戻った。

ウィーンに戻ったフリードリッヒ・ユリウスは、前職勤務を継続する傍ら、エチオピアへの再訪を切望した。1909 年、エチオピア再訪が実現した。フリードリッヒ・ユリウスは実業家エミル・ピック（Emil Pick）と共にエチオピアを訪れ、3 月にアディス・アベバに到着した。フリードリッヒ・ユリウスは、古い友人らと再会するとともに、メネリクⅡ世に謁見を許された。その後、エチオピア西部を通ってスーダンに到達し、ハルツームを経由してサイド湾から船でオーストリアへ戻った。

帰国後、フリードリッヒ・ユリウスは復職するとともに、自身の旅とエチオピアに関する多くの論文や記事を発表した。1920 年と 1923 年には、『カファ』（Bieber 1920, 1923）と題した著作を出版した。一方で、マラリアに罹患していたフリードリッヒ・ユリウスは、1923 年 1 月末、体調不良を理由に職を辞す。それでも、ドイツの民族学者レオ・ヴィクトル・フロベニウス（Leo Viktor Frobenius）と書簡を交わし、スーダン訪問の計画を立てた。ただし、健康状態の悪化により、それらの計画は実現しないまま、1924 年 3 月 3 日に 51 歳でウィーンの自宅にて永眠した（写真 3、4）。

写真 3　フリードリッヒ・ユリウスが暮らした家（2014 年 9 月筆者撮影）

写真 4　フリードリッヒ・ユリウスが暮らした家であることを示すプレート（2014 年 9 月筆者撮影）

3 フリードリッヒ・ユリウスが、なぜカファ地方に惹かれ、カファ地方に赴いたのか、その理由は現時点では明らかではない。フリードリッヒ・ユリウスの日記等を参照することで、今後、明らかにできる可能性がある。

遺された資料群[4]

フリードリッヒ・ユリウスの死後、彼がエチオピアを訪問した際に現地で収集した民族学的資料、旅行時に使用した機器、同地で撮影した写真、書籍、日記、草稿、書簡などが大量に遺された。一部の書籍は、長男フリードリッヒ（Friedrich）によって 1926 年 9 月にハンブルクに所在する機関へと売却された。その他の遺された資料は、次男オットー（Otto）が自宅に保管した。

オットーは、父フリードリッヒ・ユリウスから多大な影響を受け、アフリカに魅せられた。オットーは、フリードリッヒ・ユリウスの没後 5 年にあたる 1929 年、没後 10 年の 1934 年、没後 20 年の 1944 年に、フリードリッヒ・ユリウスの人生と業績についてラジオで紹介したり、一般講演会を開いたりした。1948 年には、それらを本にまとめて出版した（Bieber 1948）。

また、オットーはフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアで収集した民族学的資料を、展覧会を開催して一般に公開した。1936 年には、「カファ王（Kaffi Tatitino）」と題した展覧会を企画し、ハーゲンブント（Hagenbund）[5] の協力を得て開催する（写真 5）。1944 年に第二次世界大戦のもとでウィーンに戦火が及ぶようになると、オットーは家族とフリードリッヒ・ユリウスの資料群をウィーンから約 70km 離れたドナウ川沿いの町シュピッツ（Spitz）へ避難させた。第二次世界大戦後の 1945 年、オットーは民族学博物館（Museum für Völkerkunde）の協力を得て、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を彼の家族が暮らしたウィーン市 13 区の自宅へと移動させた。ただし、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を安全に保管することの重要性を感じていたオットーは、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピアで収集した民族学的資料の多くを 1946 年にウィーンの民族学博物館に貸与し、1956 年に売却する。なお、1954 年にハイレ・セラシエがオーストリアを訪問した際には、民族学博物館に展示されたフリードリッヒ・ユリウスの資料群の観覧に同行している（写真 6）。1955 年にハイレ・セラシエの戴冠 25 周年を記念する式典がアディス・アベバで開かれた際には、オットーはエチオピアへ渡航し、式典に参列している。

写真 5　1936 年に開かれた展覧会「カファ王」（写真左・次男オットー、中央・フリードリッヒ・ユリウスの妻バルタ、右・長男フリードリッヒ）
提供：クラウス・ビーバー（1936 年撮影）

写真 6　ハイレ・セラシエとオットー・ビーバー（写真右・オットー）
提供：クラウス・ビーバー（1954 年撮影）

手元に残した資料群については、自宅にアフリカ・ルームを設けて常時展示した（写真 7）。また、オットーは、複数回にわたってウィーン市内外でフリードリッヒ・ユリウスがエチオピアおよ

4 この部分の記述に関しては、クラウス・ビーバー（Bieber 2015）および、2014 年と 2015 年に実施した彼からの聞き取りによる。

5 ハーゲンブントは、1900 年から 1938 年にかけてウィーンを拠点に活動した芸術家協会である。オットーはこの協会の成員であった画家カリー・ハウザー（Carry Hauser）と懇意にしており、協力を得ることができた。

写真 7　オットーの自宅の一室に設けられたアフリカ・ルーム
提供：クラウス・ビーバー（1975 年撮影）

びカファ地方で収集した資料群の展覧会を主催した。1975 年、オットーは手元に残していた民族学的資料をウィーン市 13 区にあるヒーツィンク区博物館（Bezirksmuseum Hietzing）[6] に貸与し、その後、売却する。

1980 年 9 月 7 日、ヒーツィンク区博物館では、同館所蔵のフリードリッヒ・ユリウスの資料群が常設展示されることとなった。この常設展示では、エチオピアの民族学的資料のほか、フリードリッヒ・ユリウスが生前に用いていた机、椅子、エチオピアへの渡航時に用いたスーツケース、カメラなども展示され、フリードリッヒ・ユリウスの自室を髣髴とさせる展示がなされた（写真 8）。また、壁にはフリードリッヒ・ユリウスの写真、肖像画も展示された。その後、同館は改築のために休館し、2000 年 11 月にリニューアルオープンした（写真 9）。これに伴い、フリードリッヒ・ユリウスの資料群の展示物の内容は、エチオピアで収集した民族学的資料を中心とするものに変化した（写真 10）。なお、民族学博物館では 1973 年に開催された特別展を最後に、フリードリッヒ・ユリウスの資料群は現在まで公開されていない。

6 日本では慣例的にヒーツィングと表記される。たとえば、大阪府羽曳野市は、同区と 1995 年に友好交流都市協定を締結しているが、ホームページ上でヒーツィングと表記している。本稿ではドイツ語の発音にならってヒーツィンクと表記する。

写真 8　改築前のヒーツィンク区博物館のフリードリッヒ・ユリウス資料群の展示風景
提供：アストリド・エステルス・ビーバー（1997 年撮影）

写真 9　ヒーツィンク区博物館外観（2015 年 10 月筆者撮影）

写真 10　ヒーツィンク区博物館のフリードリッヒ・ユリウス展示室（2014 年 9 月筆者撮影）

資料群の現状

今日、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピアおよびカファ地方で収集した民族学的資料群や、彼が撮影した写真、旅行時の日記、草稿、家族や友人と交わした手紙や葉書などは、ウィーンの民族学博物館[7]、ヒーツィンク区博物館、国立図書館（Nationalbibliothek）に所蔵されている。ウィーンの民族学博物館は、エチオピアに関する民族学的資料257点を所蔵している[8]。ヒーツィンク区博物館は、200点以上のエチオピアの民族学的資料のほか、彼のプライベートに関する資料を所蔵している。また、国立図書館は、フリードリッヒ・ユリウスのエチオピア訪問時の日記のほか、カファ語とドイツ語で書かれたカファの歴史や民俗、宗教等に関する草稿など、35点を所蔵している。

国立博物館が所蔵する文書資料には、カファ地方の歴史、文化、宗教、住民の生活などに関する未刊行の文書が含まれている。なかには、文字のなかったカファ語を、フリードリッヒ・ユリウスが独自にアルファベットで表記した文書もある[9]。また、フリードリッヒ・ユリウスがエチオピア帝国を訪問した経緯や、当時のオーストリア＝ハンガリー帝国とエチオピア帝国の関係、さらには近代国家エチオピアの黎明期の様態を記した文書資料も含まれている。これらは、いずれも今日の現地調査では実証困難な、過去の歴史や人々の暮らしぶりを現在に伝える貴重な資料群であるといえよう。

ただし、ヒーツィンク区博物館に所蔵されている資料群は、必ずしも状態が良いとはいえない。同館には収蔵庫はなく、専門的知識を持つ人物や学芸員は不在である。そのため、資料の保管状態が悪く、資料の劣化・破損が進んでいる。加えて、同館が所蔵する資料群は、ほぼ全てが未整理に等しい。同館が所蔵する資料群に関する情報は、資料名称、目録番号、所蔵経緯が記された館蔵品目録に集約されている。フリードリッヒ・ユリウスの資料群は、一部の資料のみ、館蔵品目録に記録されているが、大半は目録番号が資料に記されておらず、資料に付されていた目録番号を記したラベルが剥がれ落ちている。そのため、どの資料が館蔵品目録に記録されているのか、あるいは記録されていないのかが不明であり、一から資料群の整理、調査を実施し、資料群の全体像を把握することが必要である。

資料群の再評価と可能性

従来のエチオピア研究では、歴史研究は文字資料が残されているエチオピア北部およびエチオピア帝国の歴史の解明に集中してきた。他方で、19世紀後半にエチオピア帝国によって征服・編入された南西部は文字資料が乏しく、同地に関する研究は文化人類学による同時代的研究に偏ってきた。ただし、現地調査は共時的現在を解明するうえでは有用であるものの、通時的な視点から歴史を掘り下げようとする際にはその限界が否めないという課題も残されてきた。こうしたなかで、20世紀初頭のエチオピア、カファ地方の状況を記したフリードリッヒ・ユリウスの資料群を調査する意義は大きい。

近年、オーストリアでは、フリードリッヒ・ユリウスの業績を再評価する動きが高まっている。2012年、ウィーンにてフリードリッヒ・ユリウスの伝記に関するブックレットが出版された（Holzapfel 2012）。また、2013年にはヒーツィンク区博物館にてフリードリッヒ・ユリウスに関する講演会が開催された。2017年秋のリニューアルオープンに向けて現在改装中の民族学博物館では、アフリカ展示室にてフリードリッヒ・ユリウスの資料群を主としたエチオピアに関する常設展示が設けられる計画である。また、冒頭で示したNABUによる式典以降、カファ地方でもフリードリッヒ・ユリウスの業績が知られるようになっている。2014年には、アディス・アベバにあるゲー

7 民族学博物館は、Museum für Völkerkunde という名称であったが、2013年4月に Weltmuseum Wien へと名称を変更した。ただし、本稿では民族学博物館という表記で統一する。

8 2015年2月25日、民族学博物館学芸員より聞き取り。

9 エチオピアにおいて、カファ語の正書法は1990年代に確立された。

テ・インスティトゥート（Goethe-Institut）で開催されたシンポジウム「北東アフリカにおけるドイツ語圏からの文化的研究」でもフリードリッヒ・ユリウスが取り上げられている。

フリードリッヒ・ユリウスがカファ地方を訪れた 1905 年は、カファ王国が崩壊し、エチオピア帝国に編入された 8 年後にあたる。当時のカファ社会は、数回にわたるエチオピア帝国との戦いとその後のアムハラによる統治のもとで疲弊するとともに、大きな変容のさなかにあった。こうした時期に、カファ地方に暮らした人々は、オーストリアから訪れたフリードリッヒ・ユリウスに何をどのように語ったのか。また、フリードリッヒ・ユリウスは、彼らをどのような眼差しで記録したのか。そして、現在を生きるカファの人々は、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を通して自らの歴史や文化をどのように見つめているのか。

民族学博物館、ヒーツィンク区博物館、国立図書館に所蔵されているフリードリッヒ・ユリウスの資料群は、彼がエチオピアを訪問した際の状況を生き生きと伝えるものである。また、それらの資料群は、文字化された歴史資料が乏しく、空白となっている 20 世紀初頭のカファ地方およびエチオピアの歴史と当時の人々の生活を具体的に解明する糸口となる革新的な資料群であるとともに、今日のカファの人々にとって、自らの歴史や文化、アイデンティティの形成において大きな意味を有するものとなっている。ただし、フリードリッヒ・ユリウスの資料群を基礎資料として活用し、運用していくためには、あるいはその価値を再評価して後世に継承していくためには、まずは資料群の全体像を把握し、その詳細を解明することが課題である。

謝辞

本研究の実施にあたっては、平成 27 年度・公益財団法人日本科学協会・笹川科学研究助成の助成を受けた。ここに深く感謝いたします。

参考文献

Bieber, Friedrich Julius. 1920–23 *Kaffa: Ein altkuschitisches Volkstum in Inner-Afrika; Nachrichten über Land und Volk, Brauch und Sitte der Kaffitscho oder Gonga und das Kaiserreich Kaffa*. 2 Bande. Münster i.W.: Aschendroff.

Bieber, Klaus. 2015 The Bieber Family's Fascination with Africa, *ITYOṬIS Northeast African Journal of Social Sciences and Humanities Extra Issue 2015 Cultural Research in Northeastern Africa: German Histories and Stories*, pp.139–155.

Bieber, Otto. 1948 *Geheimnisvolles Kaffa im Reich der Kaiser-Götter*. Wien: Universum Verlagsges.

Burmann, Karl. 1880 *Quer durch Afrika : Gerhard Rohlfs' und Verney Cameron's Reisen*, Leipzig: Albrecht.

Holzapfel, Josef. 2012 *Friedrich Julius Bieber (1873–1924): Ein Afrikaforscher wohnhaft in Wien-Hietzing*. Wien: Bezirksmuseum Hietzing.

von Callot, Eduard Ferdinand. 1854–55 *Der Orient und Europa. Erinnerungen und Reisebilder von Land und Meer*. Leipzig: Kollmann.

von Callot, Eduard Ferdinand. 1923 *Reise durch Kusch und Habesch: Erinnerungen und Reisebilder*. Stuttgart: Union Deutsche Berlagegesellschaft.

インターネット

Ober St. Veit: An der Wien 1133.at（2015 年 10 月 30 日閲覧）
http://www.1133.at/document/view/id/556

羽曳野市・友好交流都市ウィーン市 13 区ヒーツィング（2015 年 11 月 28 日閲覧）
http://www.city.habikino.lg.jp/10kakuka/04shiminkyodo/06tabunkakoryu/hpg000001257.html

（よしだ　さゆり／名古屋大学高等研究院）